鳳雛会のことなど

村山達雄

故大平総理は、われわれのゴルフの仲間であり鳳雛会の会長でもあった。この会は、仲間が協議のうえ政界入りしたばかりの〝おとうちゃん〟（故総理の当時の愛称）を会長にかつぎあげて発足したもので、鳳雛会という名称も会長の発案にかかるものである。年三回のコンペを三十年近く続けた勘定になるが、会長を亡くした今でも、おとうちゃんを偲ぶよすがとしていまでも続けている。ただ当時の雛鳥たちにも銀髪が目立つようになった。

おとうちゃんは見掛けによらずゴルフは器用であった。特にショートゲームは得意であった。アプローチは正確で、パットは象が玉乗りをしたようなスタイルであったが抜群であった。

戦後、ゴルフ場が再開して間もない頃、同時に習い始めたおとうちゃんと私は生涯のスクラッチプレイを約束してこの道に入ったが、酒は好き、碁、将棋、麻雀はもとより野球、相撲とひとのやることは勝負事ならなんでも好きな私と、読書の他はゴルフ一途のおとうちゃんとの間に、たちまち格差がついてしまった。それでも初めの十年くらいはどうにかついて行ったが、後半の十五年くらいはゴルフではとられっぱなしだった。私の顔をみると「今日は村山保険会社がいるから大丈夫だ」ときまってうそぶいた。癪にさわったが事実はいつも彼の言葉の正しさを証明した。しかしよくしたもので、総合収支は概数トントンであった。一ラウンドのゴルフの後一、二回麻雀をつもることが慣例であった。彼のこの方の腕は家族合せカルタ的手法で、チン一かホン一ばかりを狙っていたから赤子の手をねじるようなものだ。故池田総理以来の伝統というべきか。

しかし彼が大蔵大臣、幹事長、総理と歴任することになってから、二人の間の収支計算の帳尻が一方的になってきた。寸暇を惜しんでゴルフに参加する彼には麻雀に時間を費すなどということは時間の空費と映ったに違いない。一ラウンドすむと彼は次のハーフ続行が当然のような顔をして、スタスタと次のティーグラウンドを目指して歩き出すようになったからである。雨が降ろうと槍が降ろうとこの意志はまげられないとばかりに、口をへの字に曲げて一ラウンドがすむと先頭切って急ぎ足で歩くおとうちゃんの姿は、今でも私の瞼に焼きついている。

大平総理が初めて政界に出られたのは昭和二十七年で、私はまだ大蔵省に在職中であったが、総理は当時から、「政界は泥まみれの世界であるが誰かがやらなければならないから」といっておられた。そんな考えのせいか、後輩が政界入りの相談にゆくと他の道を奨めておられたときいていただけに、私が昭和三十八年退官を決意して相談したとき、即座に賛成していただいたのは嬉しくもあったが、他の世界に行っても迷惑をかける男だという警告でもあるような、奇妙な気持ちがしたことも事実である。

帰郷後直ちに開いた私の初の演説会に、池田内閣の外相として多忙のなか早速かけつけて激励をいただいたことは忘れられない。私は総理に一年遅れて大蔵省に入者、以来四十有余年にわたって変らざるご厚情をいただいてきたが、責任ある政界の地位を次々にふまれ辛酸に洗われながら人間大平が形成されてゆく過程を、肌身で感じとることのできたことは、私にとって喜びでもあり、貴重な財産でもある。

総理は揮毫をよくされたが、「学而無近道」とか「為而不恃、功成下居」とかの文言は、総理の謙虚な人柄を表わしているものとして、私の好きな言葉でもある。合掌。

（衆議院議員・元大蔵大臣）